

昭和五十一年（一九七六年）、ブリュッセルで開いた国際インタストリアルデザイナー団体協議会（ICSID）総会で私は会長に選出され

# 私の履歴書

司 憲 憲 憲  
久 庵 憲  
栄 久 庵 憲

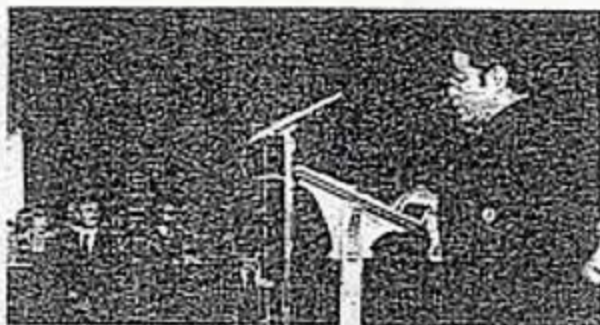
が大変な拍手を浴びた。

会長になると理事会を三カ月に一回開かなければならぬ。仕事は規約改正、事業、広報、財務活動など多岐にわたる。デザイナーが国連工業開発機関（UNIDO）など国連機関の事業に参画するための覚書を交換した。任期中、強い緊張感をもって会長職をこなした。

## アジア初、強い緊張感

日本の経済成長 期待強く

会を主宰した後、会長を退いた。ここで私はデザインの専門組織が全部一緒になって世界的機構を作り、国連にデザインヤー宣言を呼び掛けたらどうかと提案した。しかし、時期尚早などと反対もあり、当面、意志のある人が集まる調整グループができた。総会には和服で出てくれと言われたので、開会式が行わ



ダブリンのICSID総会開会式で会長としてあいさつする筆者

その後、英国の王立芸術大からサー・ミシヤ・ブラック賞が私に贈られた。好事魔多し。昭和五十三年十二月十九日夕、目の事務所で来客中に、急に胸が痛くなった。七転八倒、焼け火箸

診断で、手術はしなくてもいいが、太っているから減量しろと言われた。戦後、完全な米国型生活スタイルによる成人病だった。自分の姿に日本の経済成長の成れの果てを感じた。

絶対安静の入院生活。花で部屋をインテリアデザインしたら、おしゃれだと評判になった。隣の部屋に入院していたのが共産党の前副委員長だった袴田里見さん。話し好きで、私の部屋にきてしゃべりこむ。袴田さんが東側諸國の話をする、私が西側の話をする。いろいろなフロアの人とその話を聞きに来た。

で心臓を引っかき回す痛さだった。近所の医師に診てもらったら、心筋梗塞だと新宿の神原病院に担ぎこまれた。幸い空き室があって即入院した。若ていた服も鉄で切って脱がされた。強い狭心症という

た。イタリア人の対立候補がいたが、私が全会一致で選ばれた。初めてのアジア出身の会長だ。背景に日本の経済成長があったことは確かだ。ある種の期待があった。「二」文

長がなかったことは確かだ。ある種の期待があった。「二」文が熱心に議論したが、まとも

らう。五十二年九月のダブリン総

を経験した。

（インタストリアルデザイナー）